

創刊号に寄せて

—— 教育研究の在り方

Foreword — On educational research

筑波大学教育学会会長 桑 原 隆*

国語教育の研究に携わり、現場の実践家との研究会も定期的に月一回開催している。また、夏休みには地方の合宿研究に出掛けたり、授業を見る機会も年間何回かある。このような機会を通して、現場の教師達から教えられることも多く、私自身の研究課題が新たに喚起されることも少なくない。同時に、授業を見たり、学習指導案を読んだりしていると、疑問が湧いてきたり、疑問どころか「そんなことをしたら子供が可哀相じゃないか」と思ったり、憤慨してしまうこともしばしばである。これらの示唆、疑問、憤慨は、教育研究の在り方の問題にすべて収斂してくる。

教育研究にしても、教育学研究にしても、究極の目的は、人間形成という教育の営みを追究しながら、そこから人間形成の普遍的な原理や法則を見出し、確立していくことにあるといつてよいであろう。

熱心なある教師は、仮説をたて、その仮説に基づき授業を構想し、仮説の正当性を検証する試みを行っている。一学期にプリテストを行っておき、仮説に基づいた授業を行った後、二学期に再度同質のテストを行い、平均点を比較する。プリテストよりも平均点が点数上がった結果がでて、仮説の正しさが証明されたという。ところが、平均点は上がったとしても、子供一人ひとりを丹念に考察していくと、一学期のテストよりも点数が下がっている子供が何人かいるのである。平均点という魔物の裏側に隠れているこの事実は、どのように解釈したらよいのであろうか。平均点が上がったという事実は、果たしてその仮説の妥当性を証明したことになるのであろうか。仮説そのものよりも、実験授業ということで、いつもの授業よりも熱心に教材研究をしたその教師の熱意や意気込みが子供の学習

*筑波大学教育学系

を促進させただけなのではないのか。様々な疑問が浮き上がってくる。しかし、この教師の実験的、実証的研究を咎めたり、揚げ足をとりようとしているのではない。この実践家の例は、そのまま我々の研究に置き代えて考えることができる。

先に、人間形成という教育の営みの普遍的な原理や法則を見出し、確立していくことが教育（学）研究の究極の課題ではないかと述べた。ところが逆説的に、一人残らずすべての学習者に当てはまるような原理や法則があるのだろうかという素朴な疑問が湧いてくる。どんなに優れた教育の原理も、すべての人間に一律的に通用する原理などあるのだろうか。確かに普遍的な原理も導き出せそうな気もするが、普遍的になればなるほど、そこには普遍的とは言い切れない人間の個性が残ってくるような気がしてならない。とすると、教育（学）研究というのは、普遍性を求めながらも、なおかつその普遍性には組み込むことができない何かを究めていくことではないのか。安易な普遍的原理の追究よりも、その普遍的原理から逸脱しているものを追究していくことにこそ、教育（学）研究の真髄があるように思われてならない。ケーススタディは、そこから早急に普遍的な法則を発見していくというよりも、一つ一つのケーススタディそのものが、価値ある研究であるように思われる。